１「竜馬がゆく」

司馬遼太郎の「竜馬がゆく」を読み終えた。司馬遼太郎全集３～５巻、厚さ３センチの本３冊。長かった。ＮＨＫ大河ドラマも進行中。

江戸時代末期土佐の地に、日本の歴史を変える奇跡ともいえる、高い志を持った人が出たのである。

育った環境，姉の存在，下士の身分だったということが、結果的にあの偉業につながったのだろうと思う。脱藩浪人だったため藩から追われ、独自の考えで行動を起こし、ついに日本の歴史を変える中心人物の一人になったのだった。

いつどのようにして世界の情報を得たのか、それも近代国家につながる、当時としては想像すらできないような進歩的な考え方である。

小説を読むと、勝隣太郎の存在と彼の影響が大きかったといえる。男は何かを成すためにこの世に生まれてきたのである、という強い信念のもとついに大事を成し遂げた。

議会制民主主義と富国強兵を核とする、新政府樹立のための要綱を起草しその人選まで行った。しかし自分はその中に加えなかった。

「仕事というものは、全部やってはいけない。八分までいい。八分までが困難な道である。あとの二分はたれでもできる。その二分は人にやらせて完成の功を譲ってしまう。そうでなければ大事業というものはできない」大政奉還までは土佐が主役、それ以降は薩長が中心となるよう新政府の参議を選んだ。自分はその後「世界の海援隊」でもやろうか、、、と言っていた。

しかし、慶応３年[1867 年]１０月１５日（旧暦）大政奉還を成し遂げ、その１ヶ月後の１１月１５日、近江屋で見廻組に暗殺されてしまう。

司馬遼太郎は「暗殺者という思慮と情熱の変形した政治的痴呆者のむれをいかに詳しく書いたところで、竜馬とは何の縁もない」と言い捨て、竜馬の死を悼んでいる。（２０１０．１０．０１）